

C. 警察の役割についての期待

1. 警察官の職務範囲

近年、従来は第三者、とくに公的権力が介入してこなかった領域にも、警察の関わりを求める傾向が高まっている。警察の職務についての要望はどの程度範囲を広げているのだろうか。「警察官の業務範囲についておうかがいします。次のようなケースでは、警察は積極的に介入すべきだと思いますか」として具体的内容をあげ、それぞれのケースについて「警察が積極的に介入すべき」「他機関に任せるべき」「当事者が解決すべき」の3つの選択肢から1つを選んでもらった結果をまとめる。

(1) 親密な関係への介入

- (a) 「別れた恋人が、家まで押しかけてきて復縁をせまる。いまのところ直接暴力をふるわれていないが、迷惑なのでやめさせてほしい」（表C-1-1）

表C-1-1 警察官の職務範囲 [別れた恋人の嫌がらせ]

	積極的に介入すべき	他機関に任せるべき	当事者が解決すべき
男性	46.1	23.2	30.7
女性	33.5	25.3	41.2
全体	39.7	24.3	36.0
男性			
20～29歳	44.2	24.7	31.2
30～39	53.8	23.1	23.1
40～49	44.6	28.4	27.0
50～59	46.8	16.1	37.1
60～69	39.0	22.0	39.0
女性			
20～29歳	40.3	27.8	31.9
30～39	30.8	26.2	43.1
40～49	34.2	23.7	42.1
50～59	30.8	26.9	42.3
60～69	29.7	18.9	51.4

全体では「警察が積極的に介入すべき」がほぼ4割、「当事者が解決すべき」が4割弱、「他機関に任せるべき」が2割強である。性差があり、男性の方が警察の介入を求める

率が高く、理由は明らかではないが男性の30代では5割を超えとくに多い。女性の方が全体に警察の介入に消極的である。20代女性の4割は積極的介入を求めているが、30代女性は同年代男性より20ポイント以上少ない。男性の方がストーカー的行為の危険性をよく知っているということなのか、それとも復縁を迫るのが女性側であるとき、男性がより警察に介入を求めやすいということなのか。

女性の方が全体的に警察の介入に消極的な理由として、複雑な恋愛関係に公的権力が介入することへの抵抗感や、介入する警官が男性警官の場合女性にとって必ずしもよい結果にならないと予測されていると推測できる。警察に相談したが、適切な対応がなく、結局ストーカーの被害者女性が殺害されてしまった桶川事件の記憶も真新しい時期の調査であったことも回答に影響を与えた可能性がある。

- (b) 「隣家から女性の悲鳴が聞こえると通報があり、警察官がいてみると対応に出た女性が『単なる夫婦げんかだから心配ない』というが、その顔や手足にはひどい傷がある」
(表C-1-2)

表C-1-2 警察官の職務範囲 [夫婦喧嘩]

	積極的に介入すべき	他機関に任せるべき	当事者が解決すべき
男性	78.4	11.6	10.0
女性	81.4	12.8	5.8
全体	79.9	12.2	7.9
男性			
20～29歳	66.2	15.6	18.2
30～39	90.8	7.7	1.5
40～49	78.4	14.9	6.8
50～59	88.7	4.8	6.5
60～69	65.9	14.6	19.5
女性			
20～29歳	83.3	11.1	5.6
30～39	83.1	13.8	3.1
40～49	78.9	15.8	5.3
50～59	83.3	14.1	2.6
60～69	75.7	5.4	18.9

「夫婦喧嘩」というカテゴリー化は、パートナー間での夫(妻)の暴力について当事者もまた周囲にいる者もそれを暴力とはみなさない要因になっていた。しかし、ドメスティック・バイオレンス(親密な関係の男女の間での暴力)などの概念により女性に対する暴

力と認識されるようになり、警察の介入の必要性が重視されるようになった。

この設問は、当事者、とりわけ被害者が「単なる夫婦喧嘩だ」として介入の必要性を否定し、暴力の証拠がある場合の、警察の介入について問うものである。

大半が警察の積極的介入を求めている。若干の性差があり、「当事者が解決すべき」は男性の方が多い。男性では30代、50代で警察の介入を求める意見が多く、20代、60代で少ない。女性には年代による極端な差がない。

パーソナリティに注目すると、共感性の高い人ほど警察の積極的介入をのぞみ、共感性の低い人ほど、当事者が解決すべきと考えている

警察の仕事ぶりへの評価との関係でみると、仕事ぶりが悪化しているとみなしている人は警察の介入を支持する割合が少なく、他機関に任せるべきと考えている(5%水準:カイ二乗値7.25)。ドメスティック・バイオレンスへの警察の介入が支持され、効果をあげる上では、全体的な警察の仕事ぶりへの評価の向上が必要なことがわかる。

(2)生活上の困りごと

(c)「マンションの隣の住民が夜遅く騒いでいて眠れない。文句を言いたいが、隣との関係がきまらずになるのが心配で言いたくないので何とかしてほしい」(表C-1-3)

表C-1-3 警察官の職務範囲 [隣の騒音]

	積極的に介入すべき	他機関に任せるべき	当事者が解決すべき
男性	58.6	26.0	15.4
女性	47.9	35.1	17.1
全体	53.2	30.6	16.2
男性			
20~29歳	58.4	19.5	22.1
30~39	61.5	27.7	10.8
40~49	60.8	25.7	13.5
50~59	53.2	30.6	16.1
60~69	58.5	29.3	12.2
女性			
20~29歳	33.3	38.9	27.8
30~39	43.1	43.1	13.8
40~49	57.9	30.3	11.8
50~59	55.1	30.8	14.1
60~69	48.6	32.4	18.9

全体では5割強が警察の積極的介入をのぞんでいる。「他機関に任せるべき」が3割、「当事者が解決すべき」が2割弱である。男性の方が警察の介入への期待が多く、30代・40代では6割が警察の介入を求めている。女性も20代・30代ではそれぞれ3割、4割と少ないが、40代・50代では6割弱と多くなっている。こういった内容についての経験の有無が影響したかもしれない。

近隣との日常的なコミュニケーションが不足しがちな男性の方が近隣の騒音に耐えがたく、またトラブルの解決を警察に依存しやすいということは推測できる。男性の方が解決について任せるべき他機関に関する情報や知識をもたないといったことも考えられる。いずれにしても当事者同士に問題解決能力が低くなっている様子である。

パーソナリティとの関係では、自信度得点と回答に関連が認められた。自信度が高い人が警察の介入に積極的である。

(d)「ペットが死んだので、その亡骸を処分してほしい」

「警察が積極的に介入すべき」は少なく（2%弱）、「当事者が解決すべき」が4割強、「他機関に任せるべき」が5割強である。ただしペットの亡骸処理まで警察に求める者がゼロではない点には注意を向ける必要がある。

(e)「子どもがスーパーで万引きした。本人は学校の友達に脅かされてしかたなくやった
とっている」（表C-1-4）

表 C-1-4 警察官の職務範囲 [子どもの万引き]

	積極的に介入すべき	他機関に任せるべき	当事者が解決すべき
男性	55.2	34.2	10.7
女性	53.0	29.9	17.1
全体	54.1	32.0	13.9
子どもあり	51.1	34.5	14.3
なし	60.4	26.6	13

「警察が積極的に介入すべき」が半数を超える。目立った性差はない。男性の場合は20代、30代、60代で警察への期待が多く、中学生の親世代にあたる40代・50代ではむしろ少ない。女性の場合は20代で6割を超えるが、他の年代はさほど高くない。子どもの有無による差があり、「子どもがいない」方が「警察が積極的に介入すべき」と回答する率が10ポイント程度高い。実際に自分の子どもが問題を抱えることを想像し、警察の介入に躊躇するのではないか。他の相談機関の方が敷居が低いということであろう。

(3)教育機関への警察の介入

(f)「大学の構内でチカンの被害が連続して起こっているので、警備してほしい。被害者の証言によると、犯人はどうやらその大学の学生らしい」（表C-1-5）

表C-1-5 警察官の職務範囲 [大学構内の痴漢警備]

	積極的に介入すべき	他機関に任せるべき	当事者が解決すべき
男性	69.0	24.1	6.9
女性	71.6	23.5	4.9
全体	70.3	23.8	5.9
男性			
20～29歳	72.7	23.4	3.9
30～39	69.2	26.2	4.6
40～49	71.6	21.6	6.8
50～59	62.9	24.2	12.9
60～69	65.9	26.8	7.3
女性			
20～29歳	77.8	19.4	2.8
30～39	76.9	20.0	3.1
40～49	75.0	23.7	1.3
50～59	64.1	25.6	10.3
60～69	59.5	32.4	8.1

大学構内で当該大学学生による痴漢事件がおきている場合の問題である。

ドメスティック・バイオレンスより少ないものの、全体の7割が「警察が積極的に介入すべき」と回答した。警察の介入には若い年代の方が積極的である。50代は「当事者が解決すべき」が他に比べて若干多い。いわゆる大学紛争などを当事者として経験した世代であり、警察の介入に懐疑的なものかもしれない。20代の女性の8割近くが警察の介入に肯定的なのは、学内での痴漢行為の被害経験に由来する可能性がある。

(g)「中学校で数人の非行少年が集団で授業中に暴れ出し、授業を妨害するのでなんとかしてほしい」（表C-1-6）

中学の授業妨害についても6割強が「警察が積極的に介入すべき」と回答した。性差があり、男性が10ポイント多い。女性は「他機関に任せるべき」が3割強、男性は2割強である。当事者の解決に期待するのは1割程度と少ない。子どもの有無による差はみられ

ない。ただし、年代差があり、警察の介入を求めるのは男女共30代でとび抜けて多い（男性78.5%、女性69.2%）。

表C-1-6 警察官の職務範囲 [中学校の授業妨害]

	積極的に介入すべき	他機関に任せるべき	当事者が解決すべき
男性	68.3	23.2	8.5
女性	57.9	31.1	11.0
全体	63.1	27.2	9.7
男性			
20～29歳	63.6	22.1	14.3
30～39	78.5	15.4	6.2
40～49	66.2	25.7	8.1
50～59	62.9	29.0	8.1
60～69	73.2	24.4	2.4
女性			
20～29歳	50.0	41.7	8.3
30～39	69.2	13.8	16.9
40～49	61.8	28.9	9.2
50～59	51.3	39.7	9
60～69	59.5	27	135

2. 警察職務の改善法

「警察の仕事の仕方を改善するために、どのような方法が有効だと思いますか」として「職務研修を充実させる」から「市民の声に耳を傾ける」まで11の改善方法をあげ、3つを選択してもらった結果を表C-2-1に示す。

表C-2-1 警察の仕事の改善

	職務研修の充実	昇進制度改善	勤務評定改善	人事交流	過剰労働緩和
男性	16.9	57.4	16.9	30.7	15.0
女性	22.6	47.0	14.6	32.0	24.1
全体	19.8	52.1	15.8	31.4	19.6

匿名性排除	情報公開	女性警官増員	公安委選出透明化	第三者評価システム	市民の声を聞く
15.4	41.4	2.2	16.9	61.1	25.7
17.1	39.9	7.9	15.5	42.4	35.1
16.2	40.6	5.1	16.2	51.6	30.4

支持が高い順に「昇進制度を改善する」「第三者による組織の評価監察システムを導入する」「情報公開をすすめる」「警察外の現場での研修や人事交流を促進する」「市民の声に耳を傾ける」となっている。常識的な回答であり警察刷新会議の結論とも合致するものである。

3.今後の警察がとくに重視すべきこと

「これからの警察が特に重視すべきことは何だと思いますか。次の中から3つ選んでください」として、警察の今後の課題についての回答を求めた（表C-3-1）。

ハイテク犯罪やストーカーなど新しい犯罪に対応することを求める声が多く、こうした犯罪への不安の高まりを推測させる。凶悪犯罪の検挙率向上を期待するのは男女共60代に多い。また60代女性は地域パトロールの強化を求める率が顕著に高い。

性犯罪の取り締まりに関しても年代差が顕著で、男女共30代が期待している。被害者の保護・援助については若い世代が多く期待している。

表C-3-1 これからの警察が重視すべきこと

	男性	女性	全体
凶悪犯罪検挙率を上げる	41.7	39.6	40.6
交通事故防止	6.0	8.8	7.4
少年非行防止	45.8	36.9	41.3
ハイテク犯罪・ストーカー等新犯罪の対応	58.6	67.7	63.2
性犯罪の取り締まり	12.5	12.2	12.4
地域のパトロール強化	34.2	38.4	36.3
日常の困りごとへの親身な対応	31.0	25	28.0
被害者の保護・援助	42.6	38.4	40.5
災害時の警備強化	3.1	3.0	3.1
不祥事防止のための研修を充実	16.0	19.2	17.6